**復活節第7主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年6月1日**

**「キリストのために苦しむ恵み」**

**ヨブ記2章10節**

**2:10 ヨブは答えた。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか。」このようになっても、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった。**

**フィリピの信徒への手紙1章12～30節**

**1:12 兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。**

**1:13 つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、**

**1:14 主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。**

**1:15 キリストを宣べ伝えるのに、ねたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もいます。**

**1:16 一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、**

**1:17 他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせているのです。**

**1:18 だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいます。これからも喜びます。**

**1:19 というのは、あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです。**

**1:20 そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。**

**1:21 わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。**

**1:22 けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。**

**1:23 この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。**

**1:24 だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。**

**1:25 こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。**

**1:26 そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることになります。**

**1:27 ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、**

**1:28 どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。**

**1:29 つまり、あなたがたには、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。**

**1:30 あなたがたは、わたしの戦いをかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです。**



**先週から私たちは使徒パウロがフィリピの教会に宛てて書いた手紙である「フィリピの信徒への手紙」から共に御言葉を聞いています。かつてパウロが第2次伝道旅行で訪れた町であるフィリピ、そこで出会ったリディアという一人の女性の家が後のフィリピの教会になったと考えられています。そのフィリピの教会の様子をパウロは知るのです。そして、リディアを始め教会の兄弟姉妹が福音にあずかり続け、教会に繋がり続けていることを何よりも喜び神様に感謝をして大きな喜びを持って祈るのです。パウロはフィリピの教会を愛しています。だからこそパウロはフィリピの教会がこれからもイエス様の再臨の日に至るまで主の御心に適った歩みができ、イエス・キリストの十字架と復活の福音を宣べ伝えて神様の栄光と誉をたたえて行けるようにと大きな喜びを持っているのです。**

**そのようにフィリピの教会のために祈るパウロは今ローマの獄中にいると考えられています。使徒言行録の最後28：30～31には**

**「パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、**

**全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。」と記されています。**

**自費で借りた家に住んで訪問する者には自由に福音を宣べ伝えることはできましたが、外に出て行って自由に福音を宣べ伝える、伝道の業ができたわけではありませんでした。パウロはローマ皇帝に上告している身です。いつ裁判が開かれてもしかしたら死刑の判決を下されるかもしれないのです。ですからいつも死と隣り合わせの身にあったということができるのです。**

**私たちならそのような状況を嘆いてしまいそうですが、パウロは決して嘆きません。それは「キリストのため」（13節）であると語るのです。私はキリストのために監禁されていて、そのために福音の前進に役立っているとフィリピの教会の人々に語るのです。わたしがどんなに苦しめられてもそれはキリストのためであり、それによって福音が広がるなら私はその状況を喜んでいます。キリストのために苦しむことも喜びでありまた恵みである、それがパウロの信仰なのです。とにかく福音が広がって欲しい、その広がった福音によって一人でも多くの人がイエス様と出会い、救いへと導かれるなら私は喜んでこの苦しみを受けよう、それが使徒パウロの信仰の姿なのです。**

**そのパウロの信仰が21節の有名な言葉に表されているのです。**

**「わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」**

**私たちはイエス様の十字架の死と復活によって永遠の命が約束されています。死が全ての終わりではなくて、死の先になお希望があり、私たちにも復活の希望が与えられています。**

**でもだからと言って「早く死を迎えてイエス様の御元に行きたい」とはなかなか思えないものです。やはりこの世でまだまだやりたいこともありますし、愛する家族や友人との別れも辛いものです。できることならば、なるべく健康で長生きしたい思いがあるのは事実です。ですから「死ぬことは利益なのです」とはなかなか簡単には言えないものです。**

**先ほど申しましたように、パウロはローマでの裁判を控えていました。いつ死刑になるかわらない、死と隣り合わせの身なのです。そんなパウロにとって死とは何か。それは永遠にイエス様と共にいることができるということです。イエス様の御元で永遠にイエス様を礼拝して安らかにいられるということです。そしてパウロの思いとしてはこちらの方が望ましいと思っているのです。しかし、「生きるとはキリスト」パウロが肉に留まってこれからも使徒としてイエス・キリストの福音を宣べ伝えて一人でも多くの人を救いへと導きたいとの思いもあるのです。生か死か、そのどちらにしてもキリストが公然と崇められ、褒め称えられることには変わりないのですが、じゃあ、フィリピの教会の事を考えるとどちらの方が良いのかというとそれは「板挟みの状態」であると正直に告白するのです。**

**しかし、パウロは祈りの中で示されたのです。主の御心が示されたのです。それは肉に留まり続けることです。つまり「生きるとはキリスト」生きて、生かされてキリストを証し続けることが御心だと示されたのです。それはフィリピの教会のためです。24～25節に「あなたがたのためにもっと必要と確信している」と記されている通りです。「あなたがた」つまり「フィリピの教会の人々の信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになることでしょう。」これは物理的に今すぐフィリピの教会に行ってフィリピの教会の人々の信仰を深めて喜びをもたらすということではなく、霊的にです。霊的に一緒にいてフィリピの教会の人々の信仰を深めて喜びをもたらすために、生き続けなさい。伝道者としての地上での歩みを続けなさいと示されたということです。愛するフィリピの教会のためにさらにこの地上で用いられるそれがパウロの与えられた使命であるのです。**

**しかしそれは、パウロにとってはこの現状の鎖につながれて自由に動けないという苦しい状態を続けなければならないということでもありました。キリストのために苦しむ恵みをパウロはさらに続けて、愛するフィリピの教会のために、いえ、愛するフィリピの教会と共に戦う覚悟を与えられたのです。**

**30節にはこのように記されています。**

**「あなたがたは、わたしの戦いをかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです。」**

**パウロの戦い、これはもちろん戦争の事ではありません。剣などの武器を手にして相手と戦うという戦の事ではありません。パウロの戦いとはパウロを迫害する者との戦いの事です。かついうパウロこそがかつてイエス様を信じるキリスト者たちを迫害する者攻撃するものでした。キリストと戦うものでした。キリスト者たちを捕らえて牢屋に入れてキリスト者たちの命を奪うことが神様の前に正しいことだと信じて意気揚々と迫害を行なっていたのです。そんなパウロがダマスコに迫害に向かう途中にイエス様に出会いました。「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」イエス様との出会いによってパウロは暗闇の中を歩む者から光の中を歩む者へと変えられました。イエス様を信じて、イエス様こそが救い主だということを宣べ伝える伝道者として召されて伝道の業に励んだのです。「生きるとはキリスト」の人生を歩んでいったのです。使徒言行録で見てきましたようにパウロへの迫害、特に同胞のユダヤ人からの迫害はすさまじいものでした。ある時は石を投げつけられてパウロは死んでしまったかと思われました。ある時はパウロが語る福音のために暴動が起きて収拾がつかなくなる時もありました。**

**今パウロがローマにいるのも、パウロがエルサレム神殿を汚して神を冒涜したという事実無根の罪で訴えられている迫害との戦いの故なのです。そのパウロがフィリピの教会の人々に「あなたがたは私と同じ戦いを戦っている」というのです。つまり、ヨーロッパにありローマ帝国の支配下にあるフィリピの町にあるフィリピの教会もまた迫害者との戦いにあり、同じ戦いを私も一緒にしているというのです。パウロも一緒に戦っているのです。遠く離れたローマにいるパウロがフィリピの教会と一緒に戦っている。迫害者達と一緒に闘っているのです。このことがフィリピの教会にどんなに力強いことかと思うのです。**

**その戦いに最も必要なことが27節にある「ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。」なのです。「ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送る」これは清く正しいクリスチャンとして、まわりから「あの人は立派な信仰者だ」ともてはやされるような信仰者になるということでしょうか。決してそういう意味ではありません。**

**この「生活を送る」という言葉は元の言葉では「天に市民権を持つ者としての生き方を地上に反映させた生き方をする」という意味の言葉です。同じフィリピ書に「わたしたちの本国は天にあります」（3：20）の御言葉があります。その天の市民権です。天に国籍を持つ者、この地上での歩みを終えてやがて帰る天の故郷を持つその希望に生きる者、それが私たちキリスト者です。それはフィリピのキリスト者も同じです。ですから天に国籍を持つ、天に市民権を持つ者として、イエス・キリストの福音に繋がり続けて、慰めの御言葉、希望の御言葉、命の御言葉に聴き祈り、命の御言葉を愛をもって行なさいということです。もっと言うなら命の御言葉を武器に私と一緒に迫害者達と信仰の戦いを戦いなさいということです。**

**先日天に召されて教会でご葬儀が行われたO・Iさんは7人兄弟の末っ子で、兄弟と家族の中でIさんお一人だけがクリスチャンであるためにご家族から随分と厳しいことを言われたということを、かつてシオン会でおっしゃっておられました。農村でしかもご家族の中で一人だけクリスチャンというのは本当に信仰の戦いであったと思います。だからこそ、誠実に神様と向き合い、御言葉と向き合って信仰の歩みをなされたのではないかと思います。聖書が語る真理とは何か、そのご生涯を通じて真理を真実を探求して、信仰の戦いを戦い抜かれて天の故郷に帰られたのだと思うのです。でもその信仰の戦いは決して悲壮感溢れるものではなくて、共に歩み共に戦って下さるイエス様と共にイエス様への信頼の中で戦い抜かれたのです。生きるもキリスト、死ぬもキリスト、キリストを証しするご生涯でした。N先生が説教で語られたように、その信仰のお姿はお孫さんたちにきっと何か伝わるものがあると思うのです。**

**私たちが命の御言葉を武器にしてパウロと一緒に迫害者達と戦う、それは御言葉で人を裁き傷つけてコテンパンにやっつける戦いではありません。パウロがユダヤ人たち迫害者たちにそれでもイエス・キリストの福音を語り宣べ伝えてイエス・キリストを信じて一人でも多くのユダヤ人が救いへと導かれるように祈り願って宣べ伝えたように、人を救いへと導く戦いです。その戦いを私たちはパウロと一緒に戦っているのです。一人でも多くの人が救われるために命の御言葉を武器にして戦うのです。**

**もちろんこの戦いには苦しみが多々あります。パウロは語ります。29節です。**

**「つまり、あなたがたには、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。」**

**信仰の恵み、それは信じるがゆえにキリストのために苦しむこともまた恵みであると。私たちは忘れてはいけません。イエス・キリストが私たちのために十字架につけられて苦しまれたことを。私たちを愛し私たちを罪から救い出すために私たちのために苦しんで下さったことを。そして、死を打ち破り復活されて私たちに永遠の命を約束し天に国籍を与えてくださっていることを。私たちはこれから聖餐に与るに当たり改めて心に留めておきたいと思うのです。**

**「だから、あなたがたはこのパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである」（式文・Ⅰコリント11：26口語訳）**